

子ども会（学習会）だより

MY SKY No.10

マイ・スカイ

1997年6月24日火曜日発行（毎週火曜日子まぐれ発行）

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責・吉成正士

被差別部落を舞台に、理不尽な差別とたたかう人間像を描いた大河小説「橋のない川」で知られる作家の住井すゑ（すみい・すえ、本名大田すゑい）いぬた・すえ）さんが、十六日午後十時十分、老衰のため、茨城県牛久市城中町七七の自宅で死去した。九十五歳だった。



住井すゑさんが死去

95 歳

反部落差別描く「橋のない川」

た。故人の遺志により葬儀・告別式は行わない。
（21・31面に関係記事）
書斎の机には、一枚目に「橋のない川（第八回）」と題名が書かれた百枚以上の原稿用紙が置いてあった。
一九〇二年奈良県生ま

れ。二一年に「相剋」を発表したあと、農民文学者の大田卯（しげる）氏と結婚、農民文学活動に入った。三〇年には無産婦人芸術連盟に参加するなど、早から反権力と女性解放の活動を続けた。
三五年から夫の故郷の牛久市に住み、創作と農作

た。故人の遺志により葬儀・告別式は行わない。
（21・31面に関係記事）
書斎の机には、一枚目に「橋のない川（第八回）」と題名が書かれた百枚以上の原稿用紙が置いてあった。
一九〇二年奈良県生ま

れ。二一年に「相剋」を発表したあと、農民文学者の大田卯（しげる）氏と結婚、農民文学活動に入った。三〇年には無産婦人芸術連盟に参加するなど、早から反権力と女性解放の活動を続けた。
三五年から夫の故郷の牛久市に住み、創作と農作

先日、左のような訃報が日本全国を駆け巡りました。国内で知らない人はいないのではないかと考えるほどの人物「住井すゑ」さんです。

特に部落問題・人権問題を考える上では、避けては通れぬ人物です。高齢であつたとはいえ、惜しい人をなくしたことに変わりはありません。まさに、「巨星墜つ」といえるのではないでしょう

か。今回は急遽、記事のほとんどの予定を変更し、朝日新聞の記事を中心に読んでいただくと思います。なお、他社の新聞もあつたのですが、朝日新聞が約3000字と一番多く掲載していたので、このようにさせていただきました。

なお、読売新聞は約1500字、徳島新聞は約700字という内容でしたので参考までに。

Checking Out!

住井すゑさん追悼によせて 映画「橋のない川」記念上映

今週金曜日に郡頭集会所で行う予定の「同和教育・部落問題」勉強会を、急遽上記タイトルのように、映画「橋のない川」上映会にしようと思います。時間は7：00上演で、9：20終了の予定ですので、先生方も、保護者の方々も、この機会にもう一度、私たちの原点である水平社創立を、「橋のない川」の鑑賞をとおして、見つめ直してみましよう。

差別と格闘 書き継ぎ40年

住井さん 平和学習会も



晩年までおう盛な執筆活動を続けた住井さん＝1992年4月、茨城県牛久市の自宅で

一方で、住井さんは九五
年に雑誌「Ronza（論
座）」で、戦時中に愛国的
小説を発表していたことが
指摘され、文学者の戦争責
任をめぐって話題になった
こともある。

最近はお出をひかえ、自
宅を訪れる知人と会う程度
だったが、それでも若いこ
ろの思い出や「橋のない
川」を執筆していたころの
記憶は鮮明で、部落差別な
どの問題を熱く語って
いたという。

ろがなかった。必ず国境が
なくなる日が来ると、いつ
も断言していた。
七九年から、自宅で読者

とともに学ぶ場「抱樸舎
（ほうぼくしゃ）」を開
き、多彩な講師を招き反戦
平和の学習会を続けた。

十六日に死去した作家住
井さん（あき）の生涯は、
全七部の大長編小説で、八
部も構想中だった「橋のな
い川」との格闘に彩られて
いた。

「橋のない川」を書き始
めたのは、農民文学者だっ
た夫が一九五七年に亡くな
ってから。部落問題研究所

（全三巻）を刊行、人氣
は衰えなかった。

小説の舞台となった奈良
県の部落解放同盟県連合会
委員長の川口正志さん（あき）

住井さんは、日ごろ「地
球人として生きたい」と思
いを語り、歯に衣（きぬ）

「橋のない川」は的確、
平易な表現で被差別部落の
人々の生活を生きたと描
いた。元「解放新聞」編集
長で作家の土方鉄さん（あき）

「部落問題が今日のよう
に受け入れられていないと

きだったので、部落に対す
る認識を深めるのに大きな
役目を果たした。少年を主
人公にした児童文学的な手
法で、部落のいい面も悪い
面もしっかりと書かれてい
る」と話す。

「人間はいばつたらだ
め。土に生きよ」といつも
諭された。常に庶民の心を
大事にした反骨の女性だっ
た」と振り返った。水平社

運動発祥の地の同県御所市
にありがちな悲観的なこと

「部落問題を今日のよう
に受け入れられていないと

きだったので、部落に対す
る認識を深めるのに大きな
役目を果たした。少年を主
人公にした児童文学的な手
法で、部落のいい面も悪い
面もしっかりと書かれてい
る」と話す。

「人間はいばつたらだ
め。土に生きよ」といつも
諭された。常に庶民の心を
大事にした反骨の女性だっ
た」と振り返った。水平社

住井するゑという光芒

真の平等問、続けた生涯

灰谷健次郎



ありし日の住井するゑさん＝1995年6月、茨城県牛久市の自宅で

住井さんの訃報（ふほう）に接して、一瞬、頭がくらっときた。最近の容体を知らされていて、ひそかに覚悟はしていたのだが、それでも受けた衝撃は大きかった。

おそらく多くの住井さんの読者は、わたしと同じ気持ちであろう。

住井さんの文学と、その生き方は、容易ならざる力をもって、人々の思想形成に大きな影響を与えた。膨大な長編『橋のない川』によっ

て、人間の平等と尊厳を考えた若者はとてつもない数にのぼるはずだ。わたしは若いころ、差別小説を書くという罪を犯し、住井さんに多大

が生んだ不条理の中の人間葛藤（かっとう）を冷徹な目で描きながら、真の人間解放、そして尊厳はなにかという問いを放つものであったが、そのおそるべき先見性は、こんなにちも生き続けている。

戦争責任というものを果たしてこなかった国は、どこまで墮（お）ちていくか、この作品が明確に語っている。

いのちの優しさを阻むものに対しては容赦のない怒りを、弱いとされるいのちに対しては限りない愛を抱き続けた作家だからこそ、それを見通すことができたのであろう。

住井さんは、その生き方によっても人々を導いた。

人に上下の差はない。いのちに高い、低いはない。すべてのいのちは尊くかけがえがない、という自明のことを、自分の生涯のすべてをかけ、人々の前に明らかにしたといえる唯一ともいえる日本人である。

それを明快にするのは容易なことではない。ときには身を危険にさらすこともある。住井さんはそれをおそれなかった。

彼女の持つユーモアと楽天性が、その精神を支えたのであろう。

住井さんの最終的な思想の関心は「農」と「教育」にあった、とわたしは思う。

牛久沼で話したとき、それをしきりに聞いておられた。

「農」と「教育」の中に、戦争原理を持てこむことは反対だとわたしがいちいち、大きくうなずき、それを貫き通さなければいけないのです、と大きな声で、はっきりといった。

次も、住井さんのことばだ。

「……『橋のない川』全体も、一つの童話といえはいえろんです。部落解放運動というのは童心の運動ですよ。」

童心というのは、人間はみんな平等だという心ですね。白人の子も黒人の子も、小さいときはいっしょになって遊んでいる。けっして差別しない。いやがらない。

童心（うちごころ）ものは、ものを知らない、といっている心ではないですね。ものを一番知っている心です。人間が平等だ（びんごう）を知っているといのは、一番大きなことを知っていることですよ。子どもこそ、あらゆるものを抱擁（ほうよう）するだけの力があるわけよね……」

この邦（くに）に、住井するゑという作家を持て得たことを、わたしは誇りに思う。

この思想家こそが、我がくにの混乱を救う光（ひかり）（こうほう）だったと、しみじみ思う。（作家）

一人の人間に対してもそうであったが、ものを見る目の容赦ない厳しさ、いのちに注ぐ限りない優しさは、その文学に一貫して流れていたものであった。

わたしは『向い風』（一九五八年）を読んだときの衝撃を今も忘れることができない。『向い風』は、農地解放直後の農村を舞台に、戦争

天声人語

ひと月前、知人が、住井すゑさんのお見舞いに行った。緑に包まれた、窓から牛久沼がちらちらと見える部屋のベッドで、九十五歳の住井さんは薄桃色のやわらかな、おひなさまのような顔をしていた。さうだ▼こし初め、急に足腰が立たなくなった。次第に食が細り、流動食に頼った。記憶も薄れ、見舞いに來たのがだれなのかわからないことも多かった。けれども、特定の話題になると、住井さんは問いに答えて、十分も十五分も、しっかりと声で、思うところを語り続け、周囲の氣をもませた▼差別。人権。農業。天皇制。たとえば、そうした問題である。この作家が、生涯かけて考えてきたことがらである。脳髓の根幹に、自分の思想がたしかに根を下ろしている、だから話すのだ。知人はそう思った▼被差別部落問題を掘えた大河小説『橋のない川』は、明治四十年代に始まる。五十年前、九十歳の

とき完成した第七部で、時代はやっと昭和にたどりついた。「あと十年、百歳まで生きて戦争を書こう」。高齡を考え、悩んだ末、住井さんは心を決める。しかし、原稿用紙に第八部▼と書いたきり、机の前に座っても、筆はまったく進まなかった▼どうしてでしょう？ 知人は尋ねてみた。「むずかしくて」と、ベッドの住井さんはいった。何がですか？ 「当時の日本を取り巻く国際関係をどう考えるか。それが大変むずかしい」。そんな意味のことを語ったという▼「国家があるから、人間の差別がある。でも、つぎの世紀になれば、国境はなくなる。私は確信しています」。知人は以前、住井さんに聞かされた。たくさんの人が、あふれるほどに、その影響を受けたと思う。作家であり、思想家だった▼知人は紫とピンクのトルコ桔梗の花束を見舞いに持参した。「花はいいですね。花は、なんでも好きですよ」。顔がほころんでいたさうだ。



今回は住井すゑさんの特集号のようになっています

した。今週末には期末テストがひかえています。頑張っておきましょうね！

また来週2日には、今年度第1回の板野養護学校との交流会が、2Dにより養護学校で行われます。実り多い学び合いの場にしたいものです。

そして来週末には、いよいよ板野郡の総合体育大会があります。各部とも悔いなきよう、全力を尽くしましょうね！結果はどうであれ、全力を尽くすことが大切なのですから！

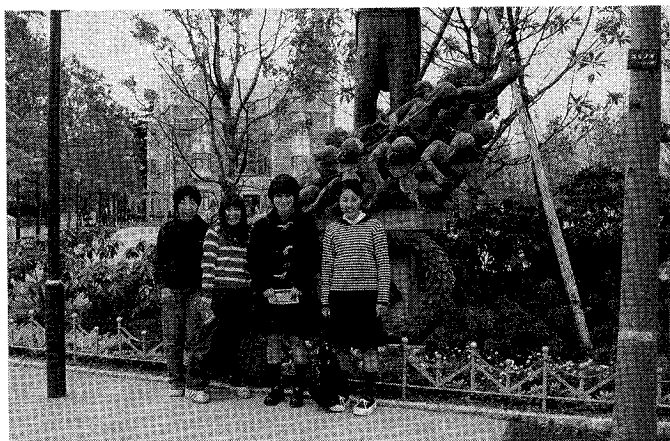
★☆☆ ★★★ ☆☆☆ ★★★ ☆☆☆

6月24日(火) 板野町同和教育研究大会「高校・養護学校部会」(板野高校)

26日(木)～30日(月) 1学期末テスト

7月2日(水) 第1回板野養護学校交流会(板野養護学校)

4日(金)～6日(日) 板野郡中学校総合体育大会



学習会閉講式 (倉敷チボリ公園) (98. 3. 12)

和田武広講演会

『二度とない人生だから⑥』

自分たちがいくら結婚して幸せになろうと思っても、その事で姉の家庭が壊される。無茶苦茶になる。いくら私でも、そこまではできない。またそれを覆すものも見いだせない。そういう中、二人で話し合い、泣き別れて別れようということになったわけです。

別れてから数カ月間というもの、私はどうしようもない自己嫌悪と挫折感、無力感で、毎日荒れた日々が続きました。酒を飲んでも酔うことすらできず、悶々と寝れない日々が続きました。

「自分は何て情けない人間なんだ。愛した女性の一人も幸せにすることができなかった……。そして何という偽善者なんだ。『部落差別はいけない』ということを、自分は大学で部落の歴史を習って、『そんなくだらんことはやめよう』と言った人間が、差別に負けちゃったやないか。偽善者やないか！」

更に自分の無力感、挫折感を感じる日々は続きました。しかしそうかといって、あの状況まで追い込まれて姉が離婚を迫られる中で、自分としてどのような道があったのか、見いだすこともできませんでした。

そういう日々が数カ月続きました。

そして四ヶ月ほど経った後、私は、「いつまでも、終わってしまったことをよくよく考えても仕方ないじゃないか。もう一度、一から出直そう。あのことはきれいに忘れて出直そう」

というふう考えたわけです。そしてやり直すために、「自分としてこの問題を総括しよう。整理をしてみよう」と思ったわけです。その総括のためには、自分がそれまでに生きてきた指針を見つめ直す必要がありました。

みなさん方にも座右の銘とか人生訓というのが一つや二つあるんじゃないかと思えます。私には、それにあたるものが二つあります。一つは「真実一路」という言葉です。山本有三さんの本にも出てきます。学生時代によく読みましたが、どんな世の中のものにしろみや不合理さにも負けず、必死に、ひたむきに真実一路の道をめざして生きていく人間の姿が彼の作品にあったわけです。

私は高校生、大学生の頃、田舎から出て「あれもしたいこれもしたい」と思っていました。しかし農家の長男ということで、田舎へ帰ることになったわけです。けど、「少なくとも真実一路の生き方をしてみたいし、そうすべきだ」とも思っていました。

もう一つの言葉が「人生二度なし」

という言葉です。中学校三年生の時に、ある大学の先生の話を聞きました。ちょうど今日みたいな形で全校生徒が集まった中で講演会があったわけです。その先生がこういうことを言いました。

「きみたちは今後、いろんな進学、あるいは就職をしていくだろう。そして、就職してからも人生のいろんな選択の岐路に立たされるだろう。どういう生き方をしてもいい。どういう選択をしてもいい。しかし、一つだけ忘れてはいけないことがある。

後で自分が後悔するような選択だけはしてはダメだ。人生はやり直しがきかないんだ。二度とない人生なんだから、後悔しないように、自分に一番正直にならなさい」

このような講演を聞いたわけです。ちょうど高校受験の時でした。この言葉に非常に励まされ、そして勉強部屋に「人生二度なし」という張り紙を書いて受験勉強をやった記憶があります。

「二度とない人生だから、真実一路に生きていきたい」自分なりの人生訓であったはずですが、ところがこの数カ月前の結婚をめぐるものは何だったのか。真実一路どころか、偽善と偏見に溺れて本当に自分というものを後悔しないような生き方ができていたのか。

もう一度自分に、その人生訓に照らし合わせて考えなおしてみようと思いま

した。そのためには何か手がかりがいる。

「そうだ自分は部落問題でつまづいたんだから、部落問題をもう一度一から勉強してみよう」

というふうに思い立ったわけです。

それから、本屋さんに行つては部落問題に関する本を手当たり次第に買ってきて、毎日毎日夜が更けるまで読む日々が続きました。一ヶ月以上続きました。「今さらこんなことして何になるのか」と「何かわかるかもしれない」という反問が離れなかつたわけです。

そして一ヶ月と数日過ぎた頃に、ふと頭の中に一つの考えが出てきました。「ああ、こうすれば二人は一緒になれていた。自分の選択はやはり間違っていたんだ！」

と、このように思ったわけです。

「これで彼女と一緒にになれる！」

と思つたとたん、現実を引き戻されました。もう彼女と別れて四ヶ月以上が経っておりまして。でも、そこでまた考えましたが、自分の気持ちを、今の正直な自分の気持ちを伝えようと思つて、手紙を書きました。みなさん方の資料の二枚目にその手紙の一部があります。ご紹介したいと思います。